

ふみの会 ニュース

■発行 ふみの会広報部
 ■発行日 2005年4月16日
 ■連絡先 藤川博樹
 〒115-0045
 北区赤羽1-48-3 ドミール藤203
 tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
 ■編集 塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

No.282

5月行事日程

■ ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
ワード文書も可

kamo@sun.email.ne.jp

エッセイ: 5枚 (2000字)

小説: 10枚 (4000字) 目安

■ 4月21日(土) 4:30

四ツ谷地域センター 11F

地下鉄丸の内線 新宿御苑下車

四ツ谷方面へ徒歩5分



陸イグアナ: ガラパゴス島2001年8月

ふみの会ニュース会費のお願い
 四月になりましたので、二〇〇五年度分の会費(二一〇〇円の支払をお願いします。支払は切手でもかまいません。その場合、八〇円切手一五枚というのが好都合です。(事務局)

■ローマ法王ヨハネ・パウロ2世が身の回りのもの以外、無所有者として死んだ。原始キリスト教の行動原理を体現して、もちろん生前は「派手な衣装に身を包んでおられたわけで、それは必ずしも原始共産主義的な共同体の原理に沿ったものではなかったけれど、ともかくも法王は生涯無一物のひととしてこの世を去ったのである。俗世間にまみれた人間には難しいことではあるが、どつちにしる人間はあの世にはなにも持っていけない。聖者も愚者も同じこと。だからこそ生産力の低い時代に生まれた原始宗教は、いずれも人びとに清貧を説いた。いま、その思想は宗教教団の肥大化にとまなつて、かつ生産力の増大にも平行して、人びとにみせかけの清貧を説く。商業主義が「死」をたくみに隠へいしたこと、人びとは自ら望んでたまされるようになった。■教団が巨大化すれば分派が生まれる。新興のかれらは時を経て、時代をくぐつて人びとの間に定着するときもあるが、多くははかなく消えていく。人間社会にあつて、この新興勢力のなかに過激なニセモノが混じるのは避けられない。いや、それは宗教というものの本質にかかわる一ことでもある。異端も正統もともに腐敗の危機にさらされる。『デカメロン』は中世ヨーロッパで、極め付けの犯罪者が死の直前の演技で聖者に列せられるさまを諷刺する。モームは『雨』で、ホーソンは『緋文字』で、コールドウェルは『巡回牧師』で、それぞれに宗教の虚偽を暴く。いかにニセモノが時代を越えて多かつたか判る。目を実社会に転じれば、イタリヤで起きたロック好きの若い司祭による少女暴行事件も耳にあたらしい。弟子には禁欲を強いて、自身は欲望のままに生きたオウムの教祖もそうだが、わが邦最大の宗教教団の会長の所業も示唆的である。こらん、あの星がぼくときみの星だよ。なんて(以下8ページへつづく)

おれたちの村

⑤

蒲原ユミ子

ざくりざくりと少しずつ健人はたま
り雪のてっぺんに向かう。

ズルツ！ おつとあぶない。外遊びが
あまり好きでない健人の足どりは、雪の
上ではよちよちという感じである。時々、
葉っぱや木のかけらがまじっている雪
坂を少しずつ進んでてっぺんに近づい
た。てっぺんはとがっているので、長く
つで雪をけとばして平らにした。そこを
ふみしめて立つ。

高いところから景色を見るってなん
て気持ちがいいのだろう。さつき近くに
行って見上げた木々が全体に見下ろせ、
自分が小さな巨人になったようだ。遠く
にムサシの家らしいじょうぶそうな小
屋まで見える。

健人はお兄ちゃんともムサシを見よう
と向きを変えようとした。その時、ズリ
ツと長くつが後ろにすべった。そして、
そのままズズズくと雪と建物の間にす
べり落ちていった。壁際は雪が消えてい
て、健人はそのすきまに落ち込み、しか
も健人がすべり落とした雪が健人の上

に落ちた。「ああっ！」という声だけ残
し、小さな健人は雪山から見えなくなっ
てしまった。

陽平はムサシといっしょにたっぷり
遊んで汗をかき、庭石にこしかけてひと
休みすることにした。そばにいるムサシ
もハアハアと息があらいが、満足げな顔
つきである。

一息ついてから、陽平は健人がいない
ことに気がついた。

（あいつ、ひとりで帰ったのかな？）
今までたまに、そういうこともあった。
陽平の村には郵便局もあるくらいでけ
っこう広い。けれど、健人はあしたから
1年生なのだからいつまでも陽平の腰
ぎんちやくではこまる。どんどん1人で
行動してもらわないと。

陽平はせいせいとした気分でする
を見た。

その空の中から、「おにいちやくん！
と呼ばれたような気がした。まわりを見
たが、だれもない。自分とムサシだけ

だ。でも、なんだかぞくつとし、ムサシ
を見た。ムサシも不安そうな目になった。
「ケントは帰ったんだよな」

陽平は安心したくてムサシにそう言
った。ムサシは忠実な家来のように陽平
を見上げた。しんと静まり返った空気が
陽平の口がかつてに叫んだ。

「ケントをさがすんだ！」

ウワン・・・ムサシはとまどったよう
に低く鳴いた。陽平は自分のポケットに
健人からかりたハンカチが入っている
のを思い出して取り出した。くしゃくし
やになったドラエモンのハンカチであ
る。ムサシはクンクンとかいだ。

陽平は石橋のある門にもどり、通りの
雪道を見た。だれもない。堀をのぞい
た。わざわざ雪をかいて落ちるバカはい
ないようだ。陽平はきよるきよる見回し
ながら思った。

（まさか、ゆうかいされたんじやあない
よなあ。けど、あいつ、とろいし・・・）
とりあえず、家にもどつてみることに
して、陽平はじいさまにあいさつしよ

と玄関に向かった。その時、ウワンワ
ンとムサシが大屋根の方でほえた。つづ
けて、ワオオーン！

陽平ははつとしてムサシの方へ走っ
た。ムサシのあんな大きなほえ声を聞く
のは初めてである。

大屋根の雪山のうらでムサシがほえ
ている。陽平は長くつで雪山を駆け上が
った。はげしくほえるムサシ。何かがす
べったあとがある。陽平は直感した、健
人がそこへすべり落ちたのだと。陽平は
家を指さしムサシに叫んだ。

「じいさまをよんでこい！」

それがムサシに通じたのか、ムサシは
すぐいなくなった。陽平は注意深く辺り
を見回し、シャベルをさがした。ない。
じいさまにかりに行くひまなどない。し
かたがなく、陽平は何も持たないまま雪
山と家のすき間にザザツとすべりおり
た。壁際の地面に力強く着地した陽平の
目に、健人の黄色いジャンパー姿が飛び
込んできた。顔を下に向けたまま動かな
い。打ち所が悪かったのだろうか？ 陽

平はあわてて健人を抱き起こした。

「ケント、ケント！」

健人の反応がない。もどつてきたムサシも、雪山でワオオンと鳴いた。陽平は青白い健人のほつぺたを強くひっぱたいた。

「ケントっ！」

ワワン！

「ケント、兄ちゃんだ！」

陽平は健人の肩を上げしくゆすぶった。うつすらと健人が目を開けた。陽平は健人を抱きしめた。

「なにやつてんだよ、バカ！」

そこへ、血相変えた山村のじいさまがやつてきた。

お屋敷の広い茶の間で、陽平と健人はあつたかいシジミ汁を飲んでいり。インスタントだけど、うまい。でかい肉まんも食わしてもらつたから、陽平はすごく満足である。

あれから健人はじいさまに抱かれ、お屋敷に入つてすぐ風呂に入れてもらった。健人の服は雪まじり泥だらけだったので、今はじいさまの息子の服を着せてもらっている。少し大きめのシャツや上着。じいさまは、「昔のものがな」と言つたが、もちろん穴などはあいていな

いし、むしろ陽平たちのよりずっと上等である。そして、なぜか、陽平には健人を風呂に入れてたり服を着せたりしているじいさまが嬉しそうにも見えた。

健人は、頭も打つたけど、雪山から落ちたシヨックで気を失つたらしい。窒息とかの心配はなかったが、そのまま長時間見つけられなかつたら大変なことだつた。

陽平は腹が落ちついてくると、あたりを何気なく見回した。太く丈夫そうな大黒柱。よけいな物など落ちていないきれいな和室。自分の家の散らかしっぱなしの部屋とは雲泥の差である。陽平は、(こ)ういう家に生まれてくればよかったな)なんて思つたりした。じいさまは人が違つたような優しい顔でまだシジミ汁をすすっている健人を見守っている。年か)ら言えは孫くらいにあたるだろうか。)

玄関で人の声がした。とたん、じいさまはふだんの気むずかしい顔にもどつた。健人に、

「ゆつくり食べていて良いのだよ」と言つて玄関に向かった。

じいさまがいなくなつたので、陽平は遠慮なくあたりを見回した。茶の間の横に、広いつやつやした廊下がある。そこをのぞく。いくつもある部屋のふすまや

木製の扉はしまつていり。廊下は薄暗くしんとしているの、こわいと言うほどではないけれど、探険してみたくなるような不思議な空間だ。

人声が大きくなつてきた。陽平はあわてて座卓の前にもどつた。

がっしりした体格のおじさんが茶の間にあらわれ、陽平たちを見て、(あれ?)という顔をした。陽平の見たことのない顔だ。おじさんは後ろのじいさまにたがねるように言つた。

「お父さん、かわいいお客様ですね」

おじさんはじいさまの息子なのか。そういうえば、がっしりとした体格や鋭い目元がそっくりである。健人の着ている服を、何十年前に着ていた人なのか、と陽平は思つた。

じいさまは息子にはこたえず、後ろのでっぷりしたおじさんに言つた。

「じゃあ、そちらの部屋で」

茶の間となりの部屋をさした。ソファとか壺とかがおかれた豪華な応接間である。さすがの陽平も、もう帰らなくてはと思ひ、せいいつぱい健人をにらんだ。

(早く、食えよ！)

入学式が終わつた後の帰りの会で、桜田先生が少しとまどつた顔で言つた。

「あしたは校庭で雪ほりをやります」

「やつたあ！」

だれかがさげんだ。陽平もそう言ひたかつたが、がまんした。もう3年生だし、おとといの健人のついらく事故では母ちゃんに久しぶりにほめられたし。その日の夜、母ちゃんが帰つてきてから山村のじいさまがやつて来て事故のことを話して謝り、(じいさまの責任ではない)だろうに) 陽平のことを頼りになる男

だとほめて帰つたのである。お屋敷の気むずかしい主にそんなふうに言われて母ちゃんはすごく嬉しそうだった。

桜田先生は自信なげに話し始めた。

「わたしは雪のないところで生まれて育つたので、雪ほりは初めてなの。いつもは3月にやるんですけど？」

しつかり者の圭子はお姉さんのような口ぶりで教えた。

「そうですね。今年は大雪でほりきれないから4月にやると言つてました」

ふうんと大きくうなずいて桜田先生はつけ足した。

「あしたは雪ほり用のシャベルをわすれないでくださいね」(つづく)

ねこ戦争

蒲原直樹

混沌市は猫の多い街だ。田園と丘陵地を急速に開発した結果、あちこちに空き地や余り地が出来、そこが格好の野良猫の住み処になるからだ。住民たちも猫に寛大で、けつして迫害したり追い立てたりはしない。彼ら自身が本来、田舎から出てきた野良住民だったからだ。

園田真理子の家の庭には大きな黒猫が住んでいた。園田家で飼っているわけではないが、以前から庭を根城にして活動しているようだ。顔の毛がライオンのように逆立ち、異様に大きな頭に見えた。さらに右目目蓋がちよつと腫れていて、いかにもケンカ慣れた武闘派の形相だった。しかし顔に似合わず出不精で庭でごろごろして餌ばかり食っている。

「お義母さん、黒豆って、いつからここにいますか？」

洗濯物をたたみながら真理子が聞くと、義母は縫い物の手を止め、

ふつと振り返って微笑んだ。

「あれはねえ、先代の黒パンの子どもなのよ」

義母は懐かしそうにその頃のことを話した。先代黒パンはやはり大きな黒猫で、ある冬の日に混沌市胡乱町へ現れた。そして町中のすべての雄猫を蹴散らし、雌猫を独り占めにした。その春に生まれたのは、飼った猫も野良猫もどれもこれも真つ黒な子猫ばかりだったという。

「でもねえ、その年は寒の戻りが厳しくてねえ、子猫たちは猫インフルエンザでみんな死んちまったんだよ」

義母のため息は深かった。彼女はそうとうな猫好きなのだ。

「黒パンがうちの庭で寝泊りするようになって、しばらくして子猫を連れてきたんだよ。それが黒豆なの。黒パンが孝之の給食のパンが好きだったように、あの子は黒豆が好きだった。ほんとに変な猫たちだよ」

孝之とは真理子の夫、すなわち義母の一人息子だ。彼は長期単身赴任で札幌にいる。義父は自分の故郷である沖繩へ帰っていてそれっきり戻り様子がなかった。この家の住人は老年と中年の女二人だけだった。

それから数日後の夜のことだった。十三夜になる月が庭を照らし、真理子はそれを仰ぎ見ていた。すると庭の隅から夜目にも白い一匹の猫がこちらへ走ってきた。真理子は「あらっ」と思い、黒豆が攻撃しやしないかと心配した。白猫は真理子の前でピタッと停まった。

「お願いにございませう」

「はい？」

その声が白猫のものだと気がつくのに数秒かかり、真理子はあつげにとられた。

「猫のいくさにごさいます。ぜひとも黒豆どのを加勢にくださりませ」

白猫がつづけ、真理子は驚きなが

らも心を引かれた。

「いくさって、猫どうしの戦争なの？」

「さようにございます。大阪より豊大岡のうまれかわり、ヒデオシどのが攻め上られ、名古屋を討ち、富士川を越え、いずれ関東に迫る勢いにごさいます。わが軍はこれをむかえうつべく、日光権現さまの生まれ変わり、黒パンどのを探してまいりましたが……」

白猫はそこで言葉をつまらせた。

「まあ、ほんと？」

「かくなる上は、黒パンどのの跡を継ぐ、黒豆どのを総大将にいたたくよりほかございませぬ。なにとぞ、その段、ご承知おきのほど」

「なるほど、わかったわ。でもね……」

真理子はちよつと心配になった。

「あの子は図体はでっかいけど寝ているばっかりで、ろくにケンカのしかたも知らないと思いますよ。そのくせ餌だけはふつうの三倍くらい食べるんですからね。ほんとにお役に立てるかどうか……」

「その分ならご心配にはおよびません」

白猫は人間のように手のひらを振った。その時、表のほうから大勢の猫のうなり声が聞こえた。白猫はびくんと耳を立て、身を翻して庭を走り出た。その後も猫たちのうなる声は続いた。庭の隅にいたらしい黒豆がのっそりと現れ、大きな伸びをした。真理子は声をかけようかと思っただけ、人間が猫に「がんばってきてね」というのも変だな、と思っただけでやめた。黒豆が表の通りに出て行くのと、猫たちのうめき声はやんだ。

その夜、混沌市胡乱町の猫たちがいつせいにいなくなった。ただ、猫が数日留守にするのはどこでもあつたこと、それが異常だとは思わなかった。一人を除いて。

園田真理子は新聞の隅から隅まで読んでみたが、猫の大移動とか、

猫の大戦争などという記事はまったく見かけなかった。彼女はやっぱりあの夜のことは夢だったのか、と考えた。しかし黒豆はいなくなり、

ついでに隣りの箱入り猫のミーちゃんもいなくなり、お向かいの老猫・蘭丸までいなくなったとなると、どこかで人間にはわからない大異変が起きているのでは、という懸念は残った。真理子はどこかでそんな研究をやっていないかしら、と思っ

て友人のインターネットで検索してもらったが、やっぱりどこにもそんなところはなかった。

「お義母さん、黒豆はどこへ行ったんでしょねえ」

義母は真理子の話を聞いた後、深く頷いた。

「だいじようぶ、あの子は帰ってきますよ……もつさりしているけど、いざとなったら強いんだから」

「でもね、豊臣秀吉と徳川家康の霊がのりうつったからって、猫同士が戦うなんて馬鹿げますよね。猫に

関係ないじゃあないですか？」

「そうよねえ、でも、いろいろあるのよ、猫の世界もね……縄張りって

いうの？それを守るのが仕事って

「どうよねえ、でも、いろいろあるのよ、猫の世界もね……縄張りって

いうの？それを守るのが仕事って

こともあるんですよ」

義母は人生が長いだけあって猫への理解も深そうだったが、真理子にはどうしても納得できない話だった。

五日目の朝、黒豆は帰ってきた。同時に隣りのミーちゃんも戻ってきたのだが、彼女美しいペルシャ猫だったのに耳が裂け、尻尾がちぎ

られていて見るも無残な姿だった。黒豆は表面上は無傷だったが、濡れ

縁に爪が落ちていたので調べてみると、手足二〇本の爪のうち残っているのは三本だけだった。いったい

どんな戦いをしたのだろう、と真理子は背筋の寒い思いをした。お向かいの蘭丸はついに帰ってこなかった。

「お義母さん、黒豆たちは勝ったんでしょか？……無事に帰ってき

ただから、きつと勝ったんでしょね……そうすると、大阪の猫たち

にもたくさんさんの怪我人、怪我猫が出たんでしょね」

「そうかもしれないねえ、かわいそ

うにねえ……」

二人は縁側で黒豆の頭をなでな

がら話していた。

「ねえ、黒ちゃん、おまえはヒデオシに勝ったのかい？それで、なにがいいことがあったのかい？おまえは、なにを守ったんだい？」

真理子が聞いても、黒豆はなんにも答えなかった。しかし中年と老年の女二人は、黒豆が質問の意味を理解しながら黙っていることを知っていた。

近藤泰寛君のこと (一)

中井 豊

私は大学を卒えて高校の教員になり、間もなく結婚した。相手とは大学オーケストラで出会った。近藤君は団員だったから、もちろん知っていた。近藤家の人達にも前から紹介してあった。それで、一家四人して文化住宅の新居に千賀子さんの運転する自動車で来てくれた。その初心者マークをつけた危なっかしい運転振りが楽しい話題になった。お父さんは娘の運転ぶりを弁護し、終始ニコニコしておられた。お祝いでジューズをつくるミキサーを買った。このミキサーは今も健在だ。

長女が生まれて間もなく、私達は鄙びた海辺の地——大阪府岬町深日にあった2DKの教員住宅に引っ越した。住宅は丘の上にあつて、借りののは四階だった。一度だけ、近藤君は電車を乗り継ぎ、一人で来てくれた。海岸に出てサビキでアジを釣り、妻に南蛮漬けにしてみらつて、夕食のオカズにした。帰る電車の窓から、近藤君は手を振った。その時、泊まるつもりだったので、とふと思つた。別れ際に少年のように盛んに手を振るのは透析をする以前の近藤君の

習性で、仕方なくそれに応じて手を振るうち、私も時に真似るようになった。身体で表現することの少ない私は大切な意志疎通の手段を教わつたのである。

妹の千賀子さんは、同じ大学のオーケストラでホルンを吹いていた林嘉夫君と結婚した。父親を早く亡くした林君が律儀にお母さんに伴われて申し込みに来たという話を聞いた。林君は大学院を経て、母校の物理学科助手をしており、古風なくらい堅実な人物だから申し分ない相手だった。

千賀子さんと林君の間に最初の子が生まれる一ヶ月ほど前にお父さんは病気で亡くなった。初孫の顔を見るのを楽しみにしていた由だった。

しばらくして、一家は林君の家近くに転居した。林家の敷地内に近藤君とお母さんの家を建てたと聞いた。林君ならではの計らいだと思われた。

私は父の助けを得て現在の家を建てた。同居して四年後に父は亡くなった。その後だつたと思うが、近藤君が自家用車を運転して遊びに来たことがある。「車は嫌いだけど、透析のせいで足が不

自由になり、仕方がない。」

と言っていた。運転免許を持たない私は彼が車を運転することに不安を抱いた。それでも、和歌山市の加太海岸まで乗せてもらつて、一緒に海で泳いだ。

「泳いでいると足の負担がない。」と言つて、嬉しそうだった。生まれつき体格はよく、小さい頃に有名な浜寺水練学校へ通つたということで、彼の水泳は達者なものだった。この時は、我家で一泊してもらつたように思う。

近藤君の企画した箕面でのコンサートに出席したことがある。それは医療の遅れたスリランカへ人口透析の器械を寄贈しようという趣旨のチャリティー・コンサートで、演奏は大阪府医師会交響楽団だった。カンパに対して、おいしい紅茶をもらった。素朴な紙袋にどつさり入つていたが、そのような香り高い紅茶は今に至るまで口にしたことはない。

後に聞いた話では、人口透析の器械を贈つても、技術指導などの面で困難が伴うため、寄付金は赤十字へ回したとのことだった。器械を贈る夢は実現しなかつたのである。

一昨年の春、大阪府医師会交響楽団を指揮されている内田博重先生と話す機会があつた。チャリティー・コンサート

のことに触れると、

「近藤君はどうしていますか？」

と訊ねられた。長らく年賀状の往来だけになっていて、返答できなかった。あれほど近藤家で世話になつたのに、移転先を訪れることすら怠つていたことに恥ずかしい思いがした。

帰つて電話しても掛からないので心配になり、林君の研究室へ電話してみると、市外局番が変更されたということだった。改めて電話し、ともかく会おうということになった。道は千賀子さんに説明してもらつた。

最寄りJR学園都市線の星田駅だった。妻と長女を連れ、駅から歩いて家を訪ねると、

「家にいるばつかして気が狂いそうや。旅行せえへんか？」

と近藤君は言う。介護で負担をかけているお母さんと千賀子さんも連れて行きたいという近藤君の意向だった。その日は私だけ泊めてもらうことになったが、夜遅く学校から帰つた林君も旅行することに同意してくれた。それで、登山の好きな私が案内できる信州へ四人で行くことになった。(つづく)

遙かなる戦火

内田幸彦

(三) 風化した太平洋戦争

前に書いた通り、現代の若者は「太平洋戦争」について知らない。

八月十五日——終戦記念日の前後になると、首相の靖国神社参拝とか敗戦五九年目とか、マスコミは一時的に伝えてはいるものの、お座なりの形式的な報道に終わり、時の流れをつくづくと感じさせられる。

日中戦争(日支事変)、太平洋戦争(大東亜戦争)は私年代の青春の総てだった。

昼夜を問わず飛来するB二九。一日三三〇グラムの少ない食糧。若者なら一度にでも食べてしまうような少量だった。それも代用食の芋、トウモロコシ、メリケン粉を取り混ぜての量だったから、お粥も腹一杯に食べられない時代だった。

身内・知人・友人の多くは単に青春を国に捧げ、国のために死ん

で行った。空襲で家を焼かれ、路頭に迷った被災者、戦災孤児も巷に溢れ、限りなく不安定な時代だった。

日本の戦争指導者たちは、広島・長崎への原爆投下に、やっと事の重大さに気付き、野望を捨て、白旗を掲げた。

急転直下、軍国主義が民主主義に変わり、それまでと逆な生活に入った。《君がため》《国のため》が《個人の自由》《消費は美德》へと、時代は全く逆転したのである。大体、日本人は軽率で定見がない。敗戦後は、白人を尊敬し、彼等のする事は御無理ごもつともで追従する。島国に育った世間知らずだから、止むを得ないかも知れないが、現代の日本人には誇りも自信も全く見られない。遊び呆けた結果である。

銀行強盗・保険金殺人・ロリコン誘拐などの犯罪、裸の氾濫など戦前にはなかった。古き良き時代の日本はどこにも見られなくなっ

た。

戦争は犯罪であり、ずいぶん苦勞させられた。だが、人間としての基礎教育だけはしてくれた。《親に孝》《他人に迷惑をかけない》《勤儉貯蓄》《老人をいたわる》など、人間の最低必要条件だけは叩き込んで置いてくれた。

子供の頃、喧嘩してくると、大抵の親は、「負けるな、相手が二つ殴れば三つ殴り返せ。」と教え、子供の加勢はしなかった。

現代では、子供の喧嘩どころか、学校教育にまで親が介入する。それがどれだけ教育を歪めているか。これでは子供は増長するばかりだ。鉄のように赤いうちに打たないから、したい放題の無軌道に育ってしまった。残業を嫌い、フリーターを好む若者達の将来に期待は出来ない。

戦後の混乱から立ち上がり、一九五〇年の朝鮮特需、一九五五年から一九五六年の神武景気、一九五八年から一九六一年にかけての岩戸景気を巧みに乗りこなし、日本を世界第一の経済大国にのし上げた主役は戦前の教育を受けた戦

前・戦中派だった。

衣食住は贅沢を極め、何をするのも自由。年が来れば年金までもらえる。こんな有難い時代を喜べるのも、あの辛い、苦しい、苦しい体験があるからこそである。

昔なら、お金のない老人は屑屋でも行商でもして、その日の糧は自分で稼ぐしかなかった。現代は、遊んでいても年金で食べられる有難い時代になった。

現代人は豊かな、自由な日々が当たり前だと思っている。自由な世の中だから、これでも不平を抱く者もいる。先人が国の繁栄に汗を流したからこそ現代の自由で豊かな生活のある事を知って欲しい。戦争中の貧しい、苦しい生活を風化させることは出来ない。書き留めて置けば、心ある人が読んでくれるかも知れない。戦中派老人の切なる思いだ。

戦争は私の青春の記録であり、人生の得難い体験となった。知らぬ間に六十年は経ち、改めて歲月の流れの速さに驚くばかりだ。

宇宙のささやき その7

宇宙背景放射

藤川博樹

私が大学に入学したのは一九七三年のことである。

入学してすぐに自治会主催で開かれた新入生歓迎ゼミナールで、天文学の講義を聞いた。講師は的川泰宣という人で、黒縁の眼鏡をかけ、若々しく初々しい講師だった。白いワイシャツに何の変哲もないズボンという、飾りの無い研究者の服装。どちらかというときやせていて背もあまり高くなかったように記憶している。

その時の講義で印象に残っているのは、最近の天文上の発見

で、K3というのがあある、つまり宇宙のあらゆる場所に絶対温度三度の電波が充満しているという発見である。

これは、宇宙背景放射といわれるもので、宇宙のどの方向からでも観測される雑音のようなものであり、ビックバンの痕跡であるとされる。

「これはごく最近のめざましい発見ですね」と的川さんが語っていたのが印象に残った。

そんな大発見が、自分の生きている身近な時代になされることがあるんだというのが、印象に残った理由である。

今調べてみると、宇宙背景放射の発見は一九六五年であり、発見したベル研究所のアーノ・ペンジアスとロバート・ウィルソンはこの功績により一九七八年にノーベル賞をもらったとある。的川さんは三〇台そこそこの若き研究者で、大学院博士課程を終了して三年しかたつていなかったことになる。

この話に感銘を受けて、天文

学の道に進んだというわけではないが、的川さんの講義は私の記憶に長く残り、夢を与え、考え方に影響を与えた。

黒体放射は宇宙のあらゆる場所であり、あらゆる方向に飛びかっている。つまり宇宙の通奏低音のようなものである。

なぜ人は音楽を聴いて感動するのか、その理由は説明できないが、音楽には感動がある、それは疑いようの無い事実である。それは宇宙のささやきのようなものであり、宇宙背景放射が宇宙に偏在するように、すべての人の心に、通奏低音を奏でているものがある。それは神といった超越的な実体として認識されることもあるが、私にとつては宇宙のささやきとして感じられるようなものである。

バッハ 管弦楽組曲第二番 カール・リヒター指揮 ミュンヘン・バッハ管弦楽団

(つづき) 他人の奥さんに普通いふか。係争中の裁判で裁判長にたしなめられているけれど、懲りたふうはない。ガルブレイス教授は、対談の場に着物の華やかな若い女性たちをはべらせた事実をたんだんと書いていくが、その筆が俗臭を嗅ぎとっているのは明らかだ。■ムーニズムのミニ日本版でも呼べそうな韓国系キリスト教の一派で、在日韓国人の牧師が成人女性から少女たちまで30人とも50人ともいわれる信者を暴行していた。テレビ放映されるこの教団の布教ビデオをみると、トランス状態を演出する典型的な洗脳型の新興宗教である。またこの手が通じるわけだ。教育基本法を改正して、宗教教育をやるべきだ、なんていうひとたちがいるが、必要なのは、こんなものにひっかからない科学的な精神だろう。宗教教育をやりたいひとたちは、とりもなおさず人間をおとなしく管理できるようにしたいわけで、ものごとを批判的にみるより、頭から信じていくようなタイプを量産するつもりなのだから、エロ牧師との距離は遠くないといえる。インターネットの占いに少なからぬ金銭を支出するひとがいる時代だ。人類は神秘主義を脱するよりも、あたらしい神秘を造り出すことに熱中しているように見える。(K)